研究課題	インド密教におけるヨーガの研究： 個人的実践の形成・展開とその公共的儀礼への適用
研究代表者	種村　隆元 （仏教学部　仏教学科　准教授）

１．研究目的

本研究は，未だ先行研究が少なく不明な点の多いインド密教におけるヨーガの実践の形成・展開を，(1) 実践者が自身の宗教的目的を達成するための個人的実践と，(2) その応用としての他者の宗教的目的を達成させるための儀礼（施主の依頼により寺院等の公共空間において執行される儀礼）という 2 つの視点から，一次文献の厳密な研究に基づき考察することを目的とする．その際，密教内部におけるヨーガの形成過程を探ることはもちろんのこと, (3) 伝統的な仏教には見られないヨーガがどのような仏教教理で正当化されてきたか, そして(4) ヒンドゥー教のタントラ, 就中, シヴァ教の対応する実践とどのような影響関係があるのかを考察し，インド宗教史における密教ヨーガの位置づけを目指す.

２．研究方法

上述の研究目的を達成するための一環として, 平成 29 年度は個人的ヨーガ実践の公共的儀礼への適用について，金剛頂経系密教を例として検討することを目指した．そしてその目的のための基礎資料として，特にアーナンダガルバ著『一切金剛出現（サルヴァヴァジローダヤー *Sarvavajrodayā*）』(『真実摂経（＝初会金剛頂経）』「金剛界品」にもとづくヨーガおよび儀礼のマニュアル）を選定した．その理由は (1) 当該文献が内容的に前後半に二分され，前半が個人的瞑想実践（『真実摂経』に説かれる「三三昧」）の方法，後半が『真実摂経』に説かれる金剛界大曼荼羅を使用した儀礼を規定していること, (2)『一切金剛出現』が依拠する体系であるところの「金剛界大曼荼羅」の儀礼体系が，公共的儀礼のベースとして考えられていたことによる．本研究課題では，平成 29 年度からの 4 年間で,『一切金剛出現』のサンスクリット語校訂テキストおよび英訳註を作成し，当該文献および関連文献の内容分析という文献学的な手法にもとづき，個人的なヨーガ実践としての瞑想と公共的な他者のための儀礼との関係の一端を解明することを具体的な目標とした.

３．研究成果と公表

①本年度得られた研究成果

上述の「研究方法」で述べた『一切金剛出現』のサンスクリット語校訂テキストおよび英訳註の作成については, サンスクリット語写本の現存する箇所（前半の個人的ヨーガ実践の「三三昧」における「最勝羯磨王（最も勝れた行為の王）という三昧」以降）のうち，後半部を構成する公共的儀礼の規定，すなわちマンダラの作成とそのマンダラを使用する儀礼（主として灌頂儀礼）の箇所に焦点を絞った．具体的な成果については以下に列挙する通りである.

(1) 現存するサンスクリット語写本（カトマンドゥ国立公文書館所蔵）のカラー画像を入手したが,

これにより，これまでのモノクローム画像では不鮮明な箇所がかなり明確になった．editio princeps である大正大学密教聖典研究会による校訂テキストは，質の高いものであり，研究者に裨益するところが大であったが，このカラー画像および近年出版されたさまざまなサンスクリット語密教文献における平行箇所との比較検討により，テキストの質をさらに高めることが可能となった．

(2) この写本にもとづき，種村と Arlo Griffiths（海外研究協力者・フランス極東学院）が忠実な転写テキスト(diplomatic edition)を作成した．

(3) これらの基礎作業を経たのち，2018 年 2 月に Arlo Griffiths が来日し，Peter-Daniel Szanto（オックスフォード大学）の協力を得て，より厳密な校訂テキストの作成に入った．

(4) 密教聖典研究会による校訂テキストおよび高橋尚夫氏の一連の論文により，『一切金剛出現』の典拠や平行箇所が明らかにされているが，今回それらに加えて，新たに別の典拠や平行箇所が明らかになった．以下に一例を挙げる．

密教聖典研究会によるテキストの§31 の冒頭部は，tataḥ svayaṃ snātaḥ sugandhāṅgo yathāptyābharaṇāmbaraḥ / suraktavastrasaṃvitaḥ sragvī surabhitānanaḥ..（【和訳】次に[儀礼の司祭は]，自ら沐浴し，良い香りのする香を身体[に塗り]，得られる限りの装飾品を身につけ，真っ赤な衣をまとい，華環を身につけ，口を良い香りにして...）と散文で理解しているが，svayaṃ から surabhitānanaḥ までは，シュローカの詩節であり，その典拠が『パラマードゥヤ *Paramādya*（理趣広経）』(『真実摂経』とおなじ「ヨーガタントラ」に分類される）であり，さらに同様の詩節が『サマーヨーガ *Sarvabuddhasamāyogaḍākinījālaśaṃvara*』にも見られることが判明した．

(5) 『一切金剛出現』の現存する唯一の写本は，破損等で欠落してテキストが失われている箇所や判読が難しい箇所がある．このような箇所のうちいくつかが，鮮明なカラー画像および平行の内容を持つ文献により復元できている．以下に一例を挙げる．

密教聖典研究会によるテキストの§29 では mānuṣāsthicūrṇahoXXX viṣasahitena maṇḍalavighnaṃ nivāryātmaśiṣyabhūpālādiśāntikahomaṃ kuryāt と読んでいる（XXX が破損による欠落箇所を示している）箇所がある．この箇所をカラー画像でチェックすると，実際に破損している箇所は 4 文字分に相当し，以下のように復元が可能である：mānuṣāsthicūrṇnah*ome*<u>na raktaviṣ</u>asahitena maṇḍalavighnaṃ nivāyātmaśiṣyabhūpālādiśāntikahomaṃ kuyāt（斜体は写本で不鮮明な読み，下線部は種村・Griffiths により補われた読み．【和訳】「粉末にした人骨と血と毒とを火に献供してマンダラの[制作を]妨害する者たちを排除して，司祭自身・その弟子・王その他のための災厄消除の護摩を行うべきである．」）．血や毒といった品を護摩に供えることにより，障害となる者たちを駆除することは，『秘密集会』他の文献にも見られる事柄である．

(6) このようにして作成された暫定版校訂テキストにもとづき，英訳註の作成も行われている．現時点では，後半部の 3 分の 1 程の暫定的な英訳註を作成済みである．

(7) これら暫定版校訂テキスト・英訳註に関しては，2018 年 2 月に行われた合同ワークショップにおいて読み合わせを行い，国内外から参加した研究者により様々な有益なコメントを頂いた．それらのコメントは，校訂テキストおよび英訳註に反映されている．

『一切金剛出現』の内容に関しても，少しく検討がなされた，先行研究により，『一切金剛出現』の前半部が後半部に対する「前行」であることが指摘されているが，前半部のヨーガの実践が後半部の儀礼の前行となる理由について，著者のアーナンダガルバは明言していないものの，その理由として，灌頂を始めとした諸儀礼を執行する司祭（阿闍梨）は，その儀礼の執行に際してヨーガにより，つまり前半部に規定される三三昧の瞑想を通して，尊格と一体化することが必要とされることが考えられる．すなわち，諸儀礼において，諸々の儀礼的な行為は阿闍梨と一体となった尊格がとり行うのであり，それにより儀礼の実効性が保証されると考えられる．実際，『一切金剛出現』の後半部では，儀礼のさまざまな場面で阿闍梨が尊格と一体化することが規定されている．一例を挙げると，曼荼羅作成の準備儀礼において，三三昧を修し，金剛界大曼荼羅の中尊であるところの大日如来と一体となり，すべての如来の「自我」を有する儀礼補助者により曼荼羅を描くための要請がなされる．ちなみに，シヴァ教のシッダーンタと呼ばれる教理・実践体系において，ティークシャーと呼ばれる入門儀礼は，シヴァが師を媒介として弟子に働きかけるものであることが説かれており，『一切金剛出現』や他の密教儀礼の説く儀礼との類似点を指摘することができる．この両宗教における類似点および相違点の検討は，タントラの形成の解明に関して重要であると考えられる．

②国内外における本研究の位置づけおよびインパクト

インド密教を含むタントラの研究は，ここ 20 年ほどの間で急速に進展してきた．これは，この宗教の教理や実践を説く聖典や註釈書のサンスクリット語原典の校訂テキストが出版され，一次文献にもとづく文献学的な研究が進んだことによる．当該分野においては，まだまだ写本の状態のままの文献が多くあり，それらの校訂テキストの作成およびそれにもとづく文献学的研究が急務である．それと同時に，数多くのサンスクリット語一次文献が，出版本あるいは写本のものを問わず利用可能になってきており，これらの資料を用いた既存の校訂テキストの見直しも急務である．

このような状況の中，本研究が対象とする『真実摂経』は，インド密教史における最重要テキストの一つであり，本経典とそれにもとづくマニュアルである『一切金剛出現』のより精密なテキストの作成は，極めて意義深いものと考えられる．特に，『真実摂経』を始めとした金剛頂経系密教の研究は，日本でこそそれなりの蓄積はあるものの，英語を始めとした欧文による研究は極めて数が少ない状況である．このような状況において，本研究が国内のみならず，欧米における当該研究にも益するところが大きいと確信するとともに，日本における密教研究の蓄積を海外に紹介するという重要な役割を担っていると考えられる．また，これまでは別個のものとして理解されがちであった「個人的ヨーガ実践」と「公共的儀礼」を共通の視点から考察するということは，これまであまりなされていなかったことである．その意味においても，本研究の当該研究分野に対する貢献は大きいと確信している．

上述の研究の結果，今後の課題として浮かび上がってきたことは，「個人的ヨーガの実践が公共的儀礼に適用されるのであるならば，そこに共通する原理はどのようなものであろうか」という

問いである．報告者はこの問いに一つの回答を与えるため，「密教の諸実践に通底する原理としてのアーヴェーシャ（憑依）の研究」という研究課題で科学研究費補助金に応募し採択された．平成 30 年度から 3 年間，本研究の結果を踏まえ引き続き研究を遂行していく計画である．

③研究成果の公表等について

本研究による結果の公表に関しては，今後 3 年間で『一切金剛出現』の校訂テキストおよび英訳註を完成させ，何らかのモノグラフの形で出版したいと考えている．また，現時点までの成果を “Towards a New Critical Edition of Ānandagarbha’s *Sarvavajrodayā*（仮題）” として，平成 30 年度中に学術雑誌にて出版する計画である．

参考文献

密教聖典研究会. 1986.「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-Sarvavajrodaya：梵文テキストと和訳(I)」『大正大学綜合佛教研究所年報』8, 258(23)–224(57).

密教聖典研究会．1987.「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyika-Sarvavajrodaya：梵文テキストと和訳(II)完」『大正大学綜合佛教研究所年報』9, 294(13)–222(85).

高橋尚夫. 1990. 「金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現：第一瑜伽三摩地品・西蔵本校訂併梵文補塡」『豊山学報』35, 150(1)–50(101).